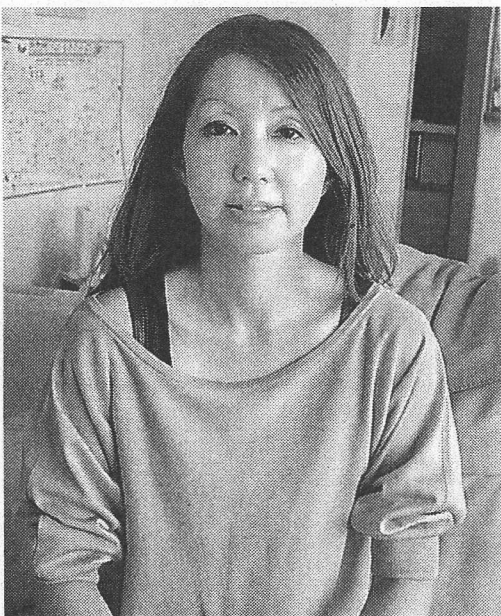


## 銃犯罪を根絶するには

「銃のない安全な国」と海外からの評価も高い日本だが、福岡県では今年17件と、発砲事件が全国最多のペースで発生している。自身は、暴力団の抗争や企業への襲撃事件とみられているが、いつ市民が巻き添えになってもおかしくない異常事態だ。銃犯罪の背景には何があり、われわれはどう立ち向かえばいいのか。銃犯罪の根絶・防止活動を続ける公益社団法人「ストップ・ガン・キャラバン隊」の立野陽子理事(43)に聞いた。

(上野洋光)

ストップ・ガン・キャラバン隊理事 立野 陽子さん



たての・ようこ 1967年、福岡県出身。2007年以降、主婦業の傍ら、ストップ・ガン・キャラバン隊の活動の企画やホームページ作成などの事務作業に携わる。

—キャラバン隊とは。

「米国で息子さんが銃弾で命を奪われた砂田尚代(なごしろ)代表ら銃犯罪の被害者遺族が集まって1994年に設立した団体だ。エアガン条例の改正や銃刀法改正、海外射撃ツアー参加の自粛などを呼び掛けてきた。私は被害者遺族ではないが、砂田代表らの活動を通じ、無関心でいられなくなった。映画やテレビゲームでも発砲や暴力シーンは相変わらず多く、子どもたちへの影響を心配している」

—なぜ、福岡県内でこんなに銃犯罪が発生しているのだろうか。

「市民の無関心が発砲事件を多発させている原因

## 聞きたい

の二つだと思う。全国調査では48%の市民が『銃を所持、撃つてみたい』と回答し、どの年代でも3人に1人が願望を持っていた。昨年、キャラバン隊が実施した福岡市の街頭アンケートでは、『福岡県は5年連続で発砲事件が最も多い都道府県であることを知っていますか』という問いに『

命』が過半数を占めた。命

を奪いかねない銃器の撲滅に対する市民の意識の低さが目立つ。私自身、福岡で育ち、この街が大好きだが、食べ物がおいしくて住みやすい街という誇りも、こういう事態を許してはならない」

—米国ならともかく、日本の市民生活と銃は縁遠い印象だが。

「2007年には佐賀県武雄市の病院で、暴力団と無関係の男性が人違いで射殺される事件が起きた。今年2月にも北九州市の大手ゼネコン事務所社員が銃弾で負傷した。日本では遠い世界の存在だったはずの銃犯罪が身近な犯罪になった、と言わざるを得ない。

## 日常に潜む危険 意識高めて

本当に、いつ一般市民の命が奪われるか。あすはあなたや、あなたの家族が巻き込まれるかもしれないのだから、市民の意識は低い」

「福岡市でタクシーに乗車したところ、『ストレス発散射撃酒場』という飲食店の案内を見た。広告としても問題がある。そのバーを見に行ったら、本物さながらのエアガンが数十丁あり、まるでピリヤードを築くかのように、女の子たちも標的に向かって撃っていた。かっこよさなのか、おしゃれ感覚からなのか、銃の怖さを意識せずに多くの人を訪れていたことに驚いた。ストレス発散であれど他に方法はあるはず。その店には子ども用のエアガンもあると聞いた。小さなことかもしれないが、見逃すことはできない。法的には問題がなくても、モラルは問われるはずだ」

—今後、どんな活動を。

「全国の教育現場で啓発講演を行っている。北九州市、大阪府に引き続き、24日には東京都でも『非行少年と暴力団』をテーマに講演活動を行う。銃を撃つ側になりかねない、行き場のない子どもたちと向き合っ

て自立更生させることが、銃犯罪の根源を絶つ上のポイントだと思っただ。銃は一瞬にして生命を奪う。銃犯罪は決して許さない。安全な社会をつくるため、市民の意識を向上させる」とが求められている」